



しびき



CONTENTS

- 12 P R 広告掲載シリーズ(1)
- 11 ドラム缶からドラム感
- 8 会員工場訪問―我が社の環境・安全対策(1)
- 7 ドラム缶のある風景
- 6 平成16年度出荷実績と平成17年度需要見通し
- 4 業界動向
- 1 経済産業省・糟谷鉄鋼課長との意見交換会概要



経済産業省 糟谷鉄鋼課長との 意見交換会 概要

日本経済の堅調な展開に伴い、ドラム缶需要も安定的な伸びを見せています。しかしながら鉄鉱石・石炭など原材料の価格高騰、鋼材の品不足が続くなど、ドラム缶生産をめぐる状況は一段と厳しさを増しています。その一因ともなっているのが中国の鉄鋼産業の動向です。4月下旬に行われた経済産業省製造産業局鉄鋼課の糟谷敏秀課長とドラム缶工業会との意見交換会では、糟谷課長から今後の中国の鉄鋼産業の動向や、日本における鋼材需給の見通しなどについて語っていただくとともに、工業会からは鋼材の有効利用にもつながるドラム缶・バレル缶の薄板化や、鋼材不足のなかで安定供給を維持するために苦心していることなど、多くの意見が出されました。

輸出ウエイト高める中国鉄鋼産業

中国における2004年の粗鋼生産量は2億7,245万6,000トンで、前年比23.2%増、5,000万トン以上の増加となりました。この生産量は世界の粗鋼生産の25%にあたり、日本・米国・ロシア3国の合計生産量と同規模です。2004年の見掛消費量(一部鋼材の重複計上あり)は3億トンを超えました。今年の粗鋼生産量も1～3月で7,779万トンで、前年同期比23.8%増、1,497万トンの増産となっており、2005年に増強される粗鋼生産能力は4,999万トンとされていることから生産量は通年で3億トンを超える見通しにあります。

ここで注目しなければならないのが中国の鉄鋼輸出入動向で、2004年は輸入が3,620万トンで前年より1,000トン近く減った一方、輸出は前年の倍以上の2,566万トンに達しました。昨年11月と12月は輸出が輸入を



上回りました。これは中国では初めての事です。2003年までは明らかに輸入国であったものが、昨年からは輸出に大きくシフトし、今後ますます輸出国になっていくのは確実です。

ただ、生産量は増加していますが、品種別に見ると低級材が多く、これが輸出に向けられており、高級材は輸入に頼っているのが実情です。日本にも中国の鋼材が大量に入ってきていますが、使えないものも多く、これをどうするかが大きな課題です。

中国では鉄鋼メーカーの集約化も進められており、年産500万トン以上のメーカーは2003年の13社から2004年には15社に2社増えています。こうしたことから、中国の鉄鋼産業は輸出ウエイトを高め、生産規模を大型化へ集約するという動きを顕著にしているといえます。

成長の制約要因も

中国の鉄鋼生産の今後の動きについては、いくつかの「成長の制約要因」が指摘できます。まず鉄鉱石ですが中国鋼鉄工業協会は鉄鉱石の一括購入を開始し、主要66社の長期契約率は約8割になっています。今年3月から中国政府は「自動輸入許可管理」を開始しました。原料炭・コークスについては2005年は国内での増産は前年ほどではなく、輸入量がさらに増加するとみえています。不足している電力ですが今年も6,000万kWhが増設されるものの、問題解消は2008年以降になるとの説もあります。輸送インフラでは中国鋼鉄工業協会が、2005年は鉄道輸送の逼迫した状況がさらに深刻なものになるとし、このため道路輸送への依存度が一段と高まり輸送コストの増加をもたらすとしています。水についても2010年に特に華北と内陸で1,000億立方メートル不

足するといわれ、環境問題への対応も一層厳しくなっていくでしょう。

構造変化急ぐ中国鉄鋼産業

こうした状況も踏まえ中国政府は、競争力の強化や産業の集中化・配置調整、海外での原材料開発の促進などを中心とした鉄鋼産業発展政策を明らかにしています。これによって中国の鉄鋼業界はどのように変化していくのか。

引き続き能力増強はスピード調整しながらも進み、その過程で集約化や海外企業との提携などの構造調整が行われることとなります。一方、ミニ高炉は規制強化や市況の軟化、コスト増のために多数閉鎖されていきます。ただこうした小規模な高炉は需給に応じて再稼働もあり得るとの指摘もなされます。全体の生産量ですが、伸び率は低下しますが継続して増えると見えています。そして輸入減少・輸出増加は一層はつきりしてくるといえます。

日本国内の鋼材需給状況の見通しは

高級鋼材はタイト感が強く、汎用鋼材ではタイト感は全くないというように需給状況はまだら模様で、品種別に分けて考える必要があります。その上で輸入品にどう対応するかということになります。一部では相変わらずタイト感が続いている状況ですが、徐々に「ものがない」から「値上げ分を製品に転嫁できない」という点に問題の重点がシフトしつつあるように思えます。経済産業省でも2月から「鋼材調達情報提供・相談窓口」をオープン



するなどしてこの問題に取り組んでいます。原料価格の動きですが、今年度は、原料炭は2.2倍、鉄鉱石は71.5%の値上げとなっていますが、来年度以降の見通しについては弱含みになるという説もありますが、一段の原料価格高を懸念する声も多く、見方が割れていません。鋼材の生産は、鉄鋼メーカーの能力増強の結果、量的には需要に対応した量が生産される見通しですが、そうしたなかにあっても、例えば厚板では商慣行を改めて有効活用を促進しようというように、鋼材を有効に使おうという動きは川上、川下に広がっています。

.....

工業会からは・・・

.....

意見交換会ではドラム缶工業会からは、鋼材の有効利用につながる薄板化、鋼材の不足状況、更生缶も品不足ぎみであること、さらにユーザーの厳しい品質要求などに関する意見が出された。

薄板化については、それをユーザーがどう受け入れるかがポイントであるとする。海外ではほとんどが1.0mm（日本は1.2mm）で、日本のユーザーも輸出用には薄板のドラム缶を使い始めているが、全体的には薄板化は大きな流れになっていないという。またペール缶については大半がワンウェイ印刷ものであるため、表面のちょっとしたキズでも返品となり、（メーカーとしては）薄くすることは難しいとの意見。充填後は結構キズがついているのにとの声もあるが。鋼材不足については、中国品がローグレードであるため使えないことが一層の品不足につながっていると指摘された。

更生缶についてもこれまでとは違った動きが現れている。その一つが更生缶にする原缶が不足してきたこと。化学品など内容物の輸出が増えていることで、ドラム缶のもどりが少なくなり、また更生缶も輸出・ワンウェイ用途が増えているため国内に残缶が少なくなっているという。さらにスクラップ価格も上がっているため回収されずにスクラップに行ってしまうケースも少なくないとしている。

ドラム缶規格の国際標準化 JISの改正について

～ 現行JIS輪帯高さ7mm以上、改正JISでは輪帯を含む外径は最大585mm～

ドラム缶の国際標準化の動きについてはひびき14号及び17号(平成9年発行)で説明しておりますが、改めてこれまでの経緯、その後の動き及び新JISの留意点について以下のとおりご報告いたします。

1. JIS改正の経緯について

- 1) 背景：ドイツ化学業界をはじめとする欧米の需要業界が、鋼製ドラムの国際標準化を要求。
- 2) 1989年に欧州ドラム缶工業会(SEFA)及び米国ドラム缶工業会(SSCI)から規格統一に関して問題提起。
- 3) 1991年に欧米の要請により、国際ドラム缶製造業者連合会(ICDM)で鋼製ドラムの国際標準化を検討課題とすることが決定。「鋼製ドラム国際標準化ワーキング・グループ」を設置。
- 4) 以降7年に及ぶ検討を経て、1996年4月のICDM 大津国際会議の際開催した第4回国際標準化WG会議で基本的合意に達した。
(合意の概要)
国際標準化の目的からは単一の規格にすることが理想ではあるが、単一規格にまとめるには相当の時間と労力を要することから、欧米工業会の草案及び日本の現行規格(JIS)を取り入れて複数規格とすることで合意。
- 5) 1996年10月ICDM標準化幹事国のオランダからISO事務局(トルコ)にISO規格化の申請を行った。
- 6) 1997年4月、ISO/TC122に「鋼製ドラム」として新作業項目の追加が決定、規格案検討のためWG6を設置。
- 7) 1997年 第1回6月、第2回12月の2回、ISO/TC122 WG6会議開催(オランダ、デルフト)。ドラム缶工業会(JSDA)の高橋技術委員長が出席。この会議に出席した欧州のユーザー(化学業界)は、二つの内径(566及び571.5mm)は不要であり、国際基準は一本に統一すべきであると強く主張したが、ドラム缶工業会は次の二つの理由により反対。
 - (1) 571.5mmへの切り替えにより多額の投資が必要になる。
 - (2) 切り替えはマーケット(ユーザー)も納得して行われるべきであるがまだその時期ではない。
- 8) ドラム缶工業会の反対により、ユーザーは国際標準を一つにするという主張は取り下げたが、優先型ドラム(Preferred Drum)と明記することを提案。JSDAはこれにも強く反対したが、最終的には優先選択目標ドラム(Preferred Target Option)と表現を少し和らげることになった。
- 9) 2002年4月15日、ISO 15750-1、2 & 3として正式発効。

2. 新JISの改正公示予定について

2004年度JIS原案作成に応募。2004年度末に最終案を(財)日本規格協会に提出。今後は日本工業標準調査会(JISC)に付議。JISC専門委員会及び担当部会で調査・審議。部会で議決後、主

務大臣に答申。改正、官報公示という手続きになります。2006年2～3月頃新JISとして公示される予定です。

3. 改正に伴う留意点について

新JISではISO規格を含んだものとなりますが、現行のJIS規格の缶は、タイプQ オープン缶はタイプD)としてそれに対応するタイプが残ります。現行JIS缶に対応する新JIS缶は、現行JIS缶と比較し以下の特徴があります。

- 1) 現行JISでは輪帯高さが7mm以上ですが、新JISでは輪帯を含む外径を最大585mmとしています。585mmとしているのは、ISOコンテナ内に4

個のドラムを並べて積めるようにするため、海外からの要求でISO規格に盛り込まれ、新JISにも反映されたものです。外径の585mmを満たしつつ内容量の下限を満たす必要があることから、現行製品より輪帯高さが低くなる可能性があります。

- 2) 輪帯高さ以外に現行JISと寸法・公差に違いがある箇所(内径、口金中心間距離、口金位置)がありますが、これらの違いはごく僅かです。

4. JIS改正内容の概要

JIS改正内容の概要は別冊のとおりです。

危険物容器及び包装の検査試験基準の改正について

本年1月1日に危険物船舶運送及び貯蔵規則並びに船舶による危険物の運送基準等を定める告示の一部が改正されました。これにあわせて(財)日本船用品検定協会の検査試験基準が改正され、容器検査に合格した容器の表示が、国記号「J」に続けて検査機関の略号を付すことになりました。

(改正前「J/製造者略号」が、改正後「J/HK/製造者略号」となります。)猶予期間が2006年3月31日までとなっていますので、一時的に製造者略号の前に「HK」のついた製品と「HK」のついていない製品が混在することになりますが、あらかじめご了承ください。

平成16年度出荷実績 と 平成17年度需要見通し

平成16年度ドラム缶出荷実績

平成16年度の200Lドラム缶の出荷は15,186千本、対前年度4.7%の増と、年初の見通し(14,000千本)を大幅に上回る結果となりました。新缶の出荷量としては、過去のピーク(平成15年度14,502千本)を凌ぐ高い水準であり、量的には昨年度に引き続いて大変環境に恵まれた年であったといえます。これは、需要の77.5%を占める化学向けは、中国を中心とした輸出堅調に加え、自動車生産の回復、また下期より新たに三西容器の生産が統計に加わったことも数字を押し上げた要因となっています。また全体の14.4%を占める石油も前年

度比1.0%増、5.2%を占める塗料も9.0%増と伸びています。ただし昨下期からの世界的鋼材不足により、鋼材の調達には苦勞しており、需要家の要望に応えられるよう全力を挙げて取り組んでいます。中小型缶は、輸出の伸びに支えられ、薄鋼板の中小型缶で1,119千本、対前年比7.3%増と11年度の1,134千本以来の高い水準となりました。ペール缶は、22,630千本と対前年度比98.8%となりました。全体の49.4%を占める主用途の石油向けは、200Lドラムの1.0%増に対して、1.4%減と14年度以降の跛行状態が続いています。また、全体の43.2%を占める化学向けも1.6%の減となっています。

平成16年度缶種別・用途別出荷実績および平成17年度缶種別需要見通し

缶種	平成16年度実績							平成17年度見通し			
	本数 (千本)	前年度比 (%)	用途別〔本数(千本)〕					トン数	本数 (千本)	前年度比 (%)	トン数
			石油	化学	塗料	食品	その他				
200L缶	15,186	104.7	(101.0) 2,186	(105.5) 11,772	(109.0) 788	(92.4) 200	(98.7) 240	357,707	15,300	100.8	360,906
ペール缶	22,630	98.8	(98.6) 11,183	(98.4) 9,779	(99.9) 940		(108.5) 728	36,703	22,630	100.0	36,583
中小型缶	1,119	107.3	9	983	18	10	99	7,306	1,162	104.0	7,630
亜鉛鉄板缶	413	125.5		195	7	3	208	2,967	469	113.6	3,345
ステンレス缶	46	110.0		34	2	2	8	1,170	49	106.5	1,239
合計	39,394	101.5	13,378	22,763	1,755	215	1,283	405,853	39,610	100.5	409,703
前年度比(%)	101.5		99.0	102.4	104.1	93.5	112.1	104.0			100.9
構成比(%)			17.0	74.5	5.1	1.2	2.2	100.0			

(注) 1. 用途別200L、ペール缶の上段()は前年度比。 2. 前年度比、構成比はトン数ベース。

品種別出荷推移 本数

本数(単位:千本)

	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度 見通し
200L缶	12,142	12,454	11,380	12,419	12,849	12,386	13,590	14,502	15,186	15,300
ペール缶	25,711	25,662	24,079	24,928	24,775	22,952	23,049	22,898	22,630	22,630
中小型缶	1,186	1,197	1,042	1,134	1,113	981	1,053	1,042	1,119	1,162
亜鉛鉄板缶	357	336	337	320	315	307	312	329	413	469
ステンレス缶	23	22	29	32	38	22	30	42	46	49
合計	39,419	39,671	36,867	38,833	39,090	36,648	38,034	38,813	39,394	39,610



平成17年度ドラム缶需要見通し

17年度のドラム缶需要は、石油向けは自動車生産回復で堅調、輸出では海外拠点での稼働進展はあるものの、新缶分野の影響は少なくほぼ横ばいとみています。一方、化学向けは海外拠点の稼働、一部荷姿変更の影響も多少はありますが、輸出牽引の基調は変わらず、前年度比約1%増を見込んでおり、全体としては前年度比0.8%増の15,300千本程度と引き続き高水準の需要が見込まれます。ただしこれには前年下期から新たに三西容器生産分が統計に加わっていますが、この構造上の変化も高水準の出荷の要因です。17年度の中

小型缶は、足下のIT関連の在庫調整、原油、円高傾向の懸念はありますが、旺盛な輸出環境は大きく変わらないとみています。また国内需要についても維持される見通しとしており、平成16年度実績の5.7%増の1,555千本程度(垂鉛鉄板、ステンレスを含む)と想定しております。ペール缶の需要は、22,630千本とほぼ前年度並みと予想されます。これは平成8年度の25,711千本に対して12%減と漸減傾向が続いています。これは需要の大宗を占める石油関係は、オイル交換の距離延長等による潤滑油消費量の減少傾向と容器の大型化による微減によるものとみており、大きな伸びは期待できない状況です。

ドラム缶のふる風景 ドラム缶風呂を楽しむ

ひびきNo.40(平成16年2月26日発行)に続き、冒険家 風間深志氏のドラム缶風呂紀行をご紹介します。今回のロケーションは新潟県北魚沼郡です。

Part 3



週刊新潮8月28日号(平成15年)掲載
撮影 / 佐藤秀明

製造業にとって「環境・安全対策」は生産活動を支える大切な要素の一つです。ドラム缶工業会でも各社・各工場それぞれにあった工夫を取り入れながら、「環境・安全対策」を推進しています。ドラム缶工業会会報『ひびき』で連載していた『会員工場訪問』(最終第28号)では今回から新シリーズとして各工場の「環境・安全対策」に視点を当てたルポを掲載いたします。第1回に登場していただいたのはJFEコンテイナー(株)の堺工場です。堺工場では地元自治体の厳しい環境規制に積極的に対応することはもとより、創意工夫による環境・安全対策に取り組んでいます。またリサイクル・リユースに優れた特徴を発揮する「エコドラム」(エコマーク認定商品)の生産拠点として環境ビジネスの推進にも力を入れています。



工場内全体の
臭気物質を処理する
総合脱臭装置

生産活動に根付かせるグループ環境方針

「環境への取り組みで基本とするのがJFEコンテイナーグループ全体の環境方針で、この理念と方針に沿って工場での具体的な取り組みを進めています」という仙賀範昭取締役堺工場長。今の「グループ環境方針」はそれまでのものを一部改定して今年4月から実行に移している。環境理念ではJFEグループの環境理念に沿って、総合容器メーカーとして循環型経済社会の形成に貢献することを掲げ、5つの環境方針では環境目的・目標を定めて改善活動を推進するとともにその成果を監視して継続的な取り組み体制を構築し、さらに省エネ・省資源、リサイクルを含む環境汚染予防措置を講じていくことも明らかにしている。また環境関連ビジネス活動を通じた循環型経済社会形成への貢献では、「オンリーワン、ナンバーワン環境指向製品、商品の開発・普及活動」を具体的な方針として打ち出している。いわばドラム缶を中心とした各種容器の生産活動と環境活動が不即不離にあることを強く意識した方針である。こうしたグループ全体の方針をベースに堺工場では今年度の「工場方針」に「環境改善活動の推進とピカピカ大作戦の継続(基本方針)」、「環境負荷低減活動の推進(重点課題)」も加え、環境負荷低減では特に廃棄物削減、省エネ、VOC(揮発性有機化合物)削減を項目として上げている。

堺工場での環境への取り組みは、実にきめ細かなところまで及んでいる。もともと同工場が立地する堺・泉北工業地帯は地元自治体の環境規制が厳しいところ。公害対策では全国トップクラスの規制基準をクリアしてきた。同社従業員の意識も高く、そうしたこれまでの経験が引き継がれて環境問題への取り組みでも自然体というか半ば無意識のうちにも積極的な関わりとなって日常化しているようだ。もう一つ、「合併によって5工場になったことも環境への取り組みを積極化する上では大きい。それぞれの工場ですべての情報を交換すること



で、こちらもそれをやってみようということも少なくない。水平展開できることが多くなったのはよいこと」(仙賀工場長)との指摘も注目される。

無駄をなくす

仙賀工場長は「環境への取り組みを一言で言えば無駄をなくすこと」につきていう。例えば、ドラム缶工場では大きなテーマの一つでもある塗装洗浄排水の処理。堺工場では塗装ラインにいくつかの工夫を加え、塗料の使用量を最適化して塗装カスの発生を少なくしている。こうすれば塗料の使用量も減るし、排水処理の負荷を和らげることも可能だ。排水処理がしやすくなったので処理薬剤の過剰使用も防げ、発生する汚泥の量の削減にもつながっている。新たな規制として登場した排水中の窒素・リンの削減にしても、処理薬剤の投入管理をきめ細かく行うことで、窒素・リンの削減を実現している。これも処理薬剤の使用量の削減につながり、処理費用の削減にも寄与する。電力使用にも「無駄をなくそう」の意識は徹底する。「蛍光灯にしても一端、全部はずしてみても、ここには絶対必要だといふところにだけ、取り付ける」(仙賀工場長)というような工夫もした。

こうした成果は数値として現れている。「電力は04年度上期ですが目標とした4%を上回る7%削減を達成、排水汚泥量は月20トン出ていたものが昨年度下期平均

は月12.6トンとなって目標の30%削減をクリアした。3%削減を目標に取り組んだ塗料カス削減では排出量が1.72トンにまで減って12%の大幅削減が達成できた。ちなみにグリーン購入も昨年度は60%に達している」(同)と、自信も深める。今年もさらにこの実績を踏まえて、次の目標に向けた取り組みを推進していくが、ここまで来ると環境負荷削減は一段と難しくなるのが通常。でも「やることはきりがない。まだまだいろいろと取り組める」(仙賀工場長)と、これは力強い宣言と受け取れる。

環境ビジネスで注目 - エコドラム

JFEコンテイナーで注目されている製品の 하나가「エコドラム」。胴部と天地板をシーム溶接し、巻締め部の強度と洗浄性を飛躍的に向上させた鋼製ドラム缶で、リサイクル率を高めて環境保全に貢献していると、1998年には包装容器として初のエコマーク商品(日本環境協会認定)に認定された。そのエコドラムの生産を担当するのがここ、堺工場。生産開始の1994年から10年経過して現在では月間8,000本の出荷と、文字通り同社が掲げる「オンリーワン / ナンバーワン」商品として、環境ビジネスを支える商品に成長している。こうした環境対応型製品を製造していることも堺工場の高い環境意識につながっているといえるようだ。

脱臭炉



塗装排水処理システム



ドラム缶製造工程の一部



工場概要

工場敷地面積：15,000m²
建屋面積：8,100m²
従業員：事務技術9名 製造ライン36名 計45名
設備能力：720缶/H(バッチ生産：内面缶400缶/H エコドラム100缶/H)
時間内生産能率：4,950缶～5,000缶/7.75H
設備効率：89～90%

きれいにすることで高まる安全意識

生産現場の安全管理は、どこまでやればいいのかということを含めて、そう容易に取り組めるテーマではない。当然のことながら多くのマニュアルがあり、他社・他工場と共通することも多いが、独自に工夫しなければならないことも少なくない。

どのような工夫があるかと、工場を見せてもらった。まず目に付くのは通路(安全通路)を色分けして明確にしていること。これは足元の安全につながっている。足元の安全ではさらにコンベアーを跨がないようにデッキを設置するなど安全な作業通路を確保する。クレーン作業のワンマン化(大型クレーン高所運転の廃止)やシート・コイルや他の玉掛け作業のノータッチ化なども安全確保を高めるのにつながっている。

JFEコンテナでは合併時からピカピカ大作戦を展開している。ドラム缶内部のクリーン度が要求されるのは今も昔も変わらないが、その顧客ニーズを満たすには「ドラム缶の内部をクリーンにするだけでなく、外もピカピカにしよう」(仙賀工場長)と取り組む。製品内部にチリなどが入らないように工程の一部をシートで覆うなどは当然の対応だとしても、工場内部はこまめな清掃の成果がきれいに整えられている。来訪者から見ると、工場屋外周辺にもピカピカ大作戦の目配りがいっていると感じられるほどに周辺の整備も進んでいる。

実は、このような徹底した品質管理の推進が作業の安全確保にも直結していく。合言葉のように使われる整理・整頓だが、堺工場を見ると、この言葉がまさに生きていると実感できる。

製造業において装置のトラブルや事故などが絶無であることはありえない。その発生をいかに極限まで減らすかが日ごろの目標であるとともに、そうした非常作業が求められる時にあってはいかにそうした事態に的確に対処するかが重要なことになる。事故やトラブルが少なくなればなるほど、いざという時の対処も経験不足から難しいとも言われる。堺工場もそうした経験が乏しくなっている工場のひとつ。仙賀工場長は最終的には「自分を守るという気持ちで、厳しくやって欲しい」と強調する。



ゆとりある「安全通路」



ピカピカ大作戦の一つ。通称「エコドーム」

ドラム缶から コラム感



昭和2年12月7日生(77歳)
千葉県出身
ドラム缶工業会 元ペール委員長
(平成8年3月～10年10月)
前 新邦工業株式会社 専務取締役
現在 同社顧問



折原 隆

平成3年にバブルがはじけ、17日湾岸戦争が始まった。リセッションが懸念され、景気の後退が心配されたが、業界への影響は少なく、この年ペール缶は高水準の生産・出荷を記録した。しかし、その後減少傾向が続くなか平成8年3月にペール委員長を拝命した。在任中はその流れは変わらず、回復の兆しがなかった。

そして今、企業価値、会社は誰のものかが問われ、80年前米国で盛んに行われた敵対的買収が喧伝されている。

現役を離れ数年経つが、社会の歩みには急激なものがある。個人的には加齢とともに体調に変化が現れてくる。若い時は元氣印でも最近は医者通いが多くなってきた。本来人間は自ら治癒力を持っていると云われているが、経年とともに免疫力が低下してくる。血液検査で、

内臓機能の一部に機能低下が疑われた。西洋医学では血液中の特定物質を測定、その標準値と比較、病を疑い、更にCT・MRI等で精密検査、疾患部を特定し、薬物・外科的に治療する。

最近人に勧められ、鍼灸治療を行っている。鍼灸は中国数千年来のもので、理論的にまだ未完成と云われている。人間の身体には14の経路が走り、その経路上に300程のツボと呼ばれる点がある。

「鍼術とは、一定の方式に従い鍼をもって身体の表面の一定部位(ツボ)に接触、または穿刺、刺入し生体に一定の機械的刺激を与え、それによって起こる効果的な生体反応を矯正し、保健及び疾病の予防または治療に広く応用する施術である。」

鍼には長さが3、4、6、9cm、太さが0.16mmから0.02mm飛びに

0.24mmまで。材質は金、銀、合金(ステンレス、サンブラ)等で、私が今治療に使用しているものは長さが4～5cm、太さが0.16mmと、0.18mmで銀製のものを使いツボに電氣的刺激を加え、自然治癒力を高める治療を受けている。初めは鍼を刺す時に痛みがあり抵抗を感じていたが、痛さも気にならず1回の時間は約1時間20分程である。これからも週2回程鍼灸院に通ってみるつもりである。

私がペール委員長を拝命した当時のペール缶の生産本数は、年間2,500万本強であったが、その後は漸減傾向をたどり、16年度は2,263万本程度にまで落ち込んだと聞いている。会員ペール缶メーカーも合併、統合などにより現在は4社に減っている。元ペール委員長としてペール缶業界が今一度活気を取り戻すよう切に願っている。

掲載シリーズ 1

ドラム缶工業会では、ドラム缶の優しい取扱いをお願いするPR広告を3回シリーズで化学工業日報に掲載しています。2005年2月22日に掲載した第1回の広告をご紹介します。

ドラム缶は丈夫そうに見えても、野積み、落下、衝突、放置などにより損傷します。傷・へこみ・腐食から内容物が漏洩したり、環境汚染を引き起こしたりすることがありますので、取扱いには充分ご注意ください。

ドラム缶の口金には品質・環境問題から平成16年度より鋼製プラグ及びユニクロメッキを推奨しています。



鋼製ドラム缶は循環型のリサイクルシステムが確立しています。回収にご協力をお願いします。



ドラム缶は
優しく使ってね



「ドラム缶の取扱上の注意」パンフレットを差し上げます。右記住所までお申し込みください。

- 鋼製タイトヘッドドラム
- 鋼製オープンヘッドドラム



ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 鉄鋼会館6F
TEL. 03-3669-5141
FAX. 03-3669-2969
E-mail : drum.pail@jsda.gr.jp
URL : http://www.jsda.gr.jp

日本ドラム缶更生工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 鉄鋼会館6F
TEL. 03-3667-8904 FAX. 03-3669-9700
E-mail : jdreaeast@io.ocn.ne.jp
URL : http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~koseidrm/

会 員

《正会員》

- | | |
|-------------|--------------|
| 斎藤ドラム缶工業(株) | (株)東京ドラム罐製作所 |
| 山陽ドラム缶工業(株) | 東邦シートフレーム(株) |
| JFE協和容器(株) | (株)長尾製缶所 |
| JFEコンテナ(株) | 日鐵ドラム(株) |
| (株)ジャパンペール | (株)前田製作所 |
| 新邦工業(株) | 森島金属工業(株) |
| ダイカン(株) | (株)山本工作所 |

《賛助会員》

- エノモト工業(株)
三恵マツオ工業(株)
丹南工業(株)
(株)大和鐵工所
三喜プレス工業(株)
(株)城内製作所
東邦工板(株)
(株)水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
(鉄鋼会館6階)
TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969
e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL: http://www.jsda.gr.jp

ひびき No.45(平成17年5月31日発行)
発行人 ドラム缶工業会
専務理事 藤野 泰弘